

---

# リアルDEポケモン

鬼赤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リアルDEポケモン

### 【Nコード】

N1705G

### 【作者名】

鬼赤

### 【あらすじ】

多分好奇心旺盛で、少し臆病な高校生の主人公…朱上烈弥、主人公の同級生で部活の副部長…蒼山水城、同じく主人公の同級生で主人公の親友的存在…翠川葉、この3人の自分の街を守る突如出現したロケット団との闘いはいかに

## プロローグ これが俺だ！

朝起きて、飯食って、自転車に乗って学校に行く。

HR、午前、昼食、午後、部活ソフトテニスと続き家に帰る。

晩飯食って、風呂に入って、宿題やって、就寝。

これが俺の平日。

朝起きて、飯食って、メールチェックして、自主トレとして走って学校に行く。

一年だからランニング、筋トレ、片付け、友達と帰宅。

そのまま友達と昼飯食って、ゲーセン行って、晩飯食って自転車2人乗りで家に帰る。

それで、風呂に入って、ゲームして…（こっから自由）、就寝。

これが俺の休日。

そんな俺の高校生活。

今日も→のように学校に行き、家に帰ろうとしていた。

帰り道に山があるんだわ、立ち入り禁止になっているわけよ。

でな俺は見ちゃったわけ、その山に出入りする奇妙な老人を。

んで自分で言うのも何だけど俺は好奇心旺盛なんだわ…多分。

ついついそのじーさん追いかけて山に入っちゃったわけよ、んで見ちゃったんだ。

そのじーさん、奇妙な動物たちにエサ与えてたんだよ。

俺はその奇妙な動物たちにビックリして山を飛び出したんだよ。

家に帰って親に話したら…馬鹿にされたよ、友達にメール送ったさ…夢でも見たんじゃないかって、昔から住んでる近所のじっちゃんにも言ったさ…すると山の神に幻覚でも見せられたんだろうって、山の地主にもダメ元で言ってみたさ…あの山は入り組んでて危険だ

から入るなって普通に怒られたよ。  
ひでえ話だ、誰一人信じてくれねえ。  
で、諦めて今日は寝たんよ、明日学校だし。

で、次の日：

いつもどおり学校に向かった。

だが、いつもと違っていた：なぜならっ。  
寝坊してしまったからだ。

遅刻覚悟で猛ダッシュだぜっ……って、またあのじじい！

昨日のように山に入っていたんだよ、そんでそのまま追いかけて  
うとしたわけよ……だがやめたよ。

ビビってるわけじゃないよ、俺は臆病者じゃないからね、臆病だっ  
たら昨日の時点で逃げてるさ。

……スマン、俺ってば昨日ビックリして帰ったのすっかり忘れてた  
わ。

話戻すけどな、やめたわけは学校に行ったんだわ、学生は勉強第一  
だからな。

それに遅刻はいけねえぜ、また職員室呼び出しはつれえからな……う  
ん。

で、怒られ覚悟で行ったらさ、一時間目から自習らしくて出欠とら  
れずにラッキーなことだったよ。

放課後オ：

って早っ！？

授業はどうしたあってか？

小説で授業やってもつまんねえだろ？

つとと、話が脱線しちまうとこだったぜい。

今日は部活がないからあのじじいを追いかける時間がたっぷりあるぜ、さあ自転車飛ばして行くぜええ……と意気込んでいると話しかけてくるんだわ、同じ部活の同志達がさ。いつもはOKOKと拒否ってナンですかっというくらい話を聞いてやるんだが、今は時間が惜しいのだ。

さらば同志達よ、また明日、（俺が）生きていれば必ず会おうではないか！

同志達に別れを告げ向かった先はそびえ立つ闇へと続く山、今日こそあのじじいの正体暴いてやるぜえ……つつても、昨日からだ。

早速じじい発見、そして追跡、前進するたびに迷わぬよう目印を木々に付け俺は山を駆け上がる、その先に続く俺の運命やいかに……？

で、俺の運命は、道に迷うということで幕を閉じた……

B A D    E N D …

って終わらすなつての、続くつての、面白くもなんともないつての。  
で目印付けときながら迷ったわけ、右も左も木、木、木。

下は地面、上は……超巨大な鳥が飛んでいるという摩訶不思議な空。  
きつと親や友達に話したら精神科にでも行けって言われるんだろう  
なあ……。

いやそれよりも、ここから抜け出さないと親にも友達にも会えず息  
絶えてしまうんじゃないのか!?

だめだ……生きる!俺は生き延びる!生き残って俺は光を見るんだあ  
!!!!

……と意気込んでいた俺はこの後、崖から落ちて気絶してしまった  
のだった。

続くよ

## 第01話 あの子の向こうは

崖から落ちて気絶してしまった俺が、気が付いて最初に見たもの、それは…あのじじいと奇妙な動物たちだった。

しかもその動物たちをよく見ると、最近俺がやっているポケモンというゲームのモンスターだった。

ああ…きつとこれは夢だ、夢に違いない！まやかしだ！幻想だ！幻覚だ！確かに最近ポケモンが実現したら楽しいだろうなあとは思ってたさ、しかしこんなことが実現してもいいのだろうか、ポケモンが実現していたらポケモンたちが悪い大人に道具として扱われてしまうだろう。

いけないそんなことになってしまつては…あつ、そうだ、これは夢だったんだ、忘れてたぜえ…ふう。

「…ゴホン！」

「！？…なんだよ誰だよなただよ。人が考えてるってのにいきなり咳払いで、考えを遮ってくるのはあ！」

「それが気絶していたところを介抱してもらつた者の言い方？それにまず自分から名乗るものじゃないの？」「…（…間違つてないな。いい姉さんじゃん）<sup>アカガミレッツヤ</sup>朱上烈弥だ！さあ、姉さんの名前とじじいの名前を教えろ！」

そう、俺は朱上烈弥だ…：…そういや名乗つたのって初めてか。

いやあすまんかったなあ、ハッハッハッ。

「私はナナミよ。こちらはポケモン博士のオーキド。よろしくね」

「おう、よろしくな、早速質問。ここどこだ？あんたら何でこんな山奥に住んでんだ？つかあんたらナニモンだ？どうしてゲームのキャラの名前なんだ？まさかゲームの世界から来たんじゃないよな

？そんなこと抜かしたら例え姉さんでも俺怒っちまうぞ？高校生なめんじゃねえぞ？そっちのじじいの場合のみぞおち一発でぽっくり逝っちまうんじゃねえのか？まあそうなったって俺には関係ないけどな？多分理由がこんなんだったらいいなあ、まあ例えだけどさ、俺の世界とあんたらの世界がたまたまくつついちまってその境界線的なものがたまたまこの山になってしまったと。そこでこの山からポケモンたちが逃げてしまったりした、それとこの山以外にもコッチの世界と繋がる場所があったりして、そこからロケット団とかも俺の世界に來ちまった……っと、単なる俺の妄想だから気にすんないよ。で、実際のところどうなんだ？」

どうだ？この俺の machine gun talk は？流石に姉さんでも聞き逃さずにはいられまい……って、あれえ！？俺って目的変わってんじゃないん、っーか性格も変わってるう！？……ってかさあて、姉さんの反応見てみつか。

「……」

「って、何そんないその通りです……的な顔は」

「……その通りよ。大体は烈弥君のいう通りよ。ロケット団の一部と野生ポケモンたちがあなたの世界に行ってしまったの。それで博士と私はポケモンを回収しに來たのよ、混乱するといけないから。そして……」

……そして？

何だ？

まさか俺にポケモンを使ってロケット団を退治しろってか？マジで？俺がポケモン使って闘えるのか？これは現実なんだな？夢じゃないんだな？よしっ、頬をつねって……痛っ、夢じゃない！いよっしやああ！！……って、これ単なる俺の思いつきじゃねえかあ！この癖直さなきゃやべえな、うん、全く。



「そして、この世界でロケット団を退治してくれる人を捜しにきたの」

キタアアアア！！！来たぜ、俺の時代、絶対俺にそれを頼む気だな、最初のポケモンはなんだろう？俺はやっぱヒトカゲ辺りがいいかなあ……って、また勝手な妄想があ……。

「……って、烈弥君にこんな話しても無理よね。それになんでかしらないけど既に捕まえたポケモンは連れてこられなかったのよ」

ナニイイイイ！？そりゃねえよ、じゃあ野生ポケモンを素手で捕まえろってかあ？無理無理無理無理イ！いや、モンスターボールがもってこれなかった訳じゃないよな、うん、きっとそう、いやそうに違いない！

「ナ……ナナミさん！ロケット団退治、俺にやらせてくれ！」

「え、そんな……迷惑じゃない？」

「そんなわけない！というか、逆に俺の世界の人ならば絶対にポケモントレーナーになりたいって思ってるって」

「でも烈弥君、どうやって闘うの？」

「う……」

「その点は心配無用じゃ」

「「博士」」

「ポケモンの変わりにこの図鑑とリストバンドを授けよう。これは図鑑と連動しており今まで出会ったことのあるポケモンに変身出来るのじゃ。因みにモンスターボールもあるからゲットも可能じゃ。それじゃ、ワシは出かける。そろそろ行かんとラジオが間に合わん。ナナミ、あとは頼む」

と、博士は行ってしまった。

俺はナナミさんにポケギアをもらい、そこを後にした。

家に戻るとすでに夜だった。

そして……次の日はテストと言うことを思い出し、徹夜で勉強した。

結果は……聞くな！

## 第02話 ついに変身…俺、ポケモン？

テストが終わっ一週間、とある日、朝練の為に4時に起きた。  
実はナナミさん達に出会ったことは夢だったんじゃないかと、未だ思っている。

でも、毎朝ポケギアを見る度にホントなんだなと思うんだ、そんで……早くポケモンに会いたいと思うわけよ、……えっ？何でかって？だってポケモン白紙だし、出会わなければこの変身リストバンドも（いや、ホント知らんけどな）意味ないし。

って、読者に説明してる場合じゃねえ、早く行かないとうっせえババアに怒られちまう、あ、俺の部活…ソフトテニスな…男女共同なんだ。

ババアってのは副部長の事だ…うん、説明してる場合じゃ無かったんだった、ああ…鳥ポケモンに変身出来たら楽なのになあ。

俺は家を出て、自転車のペダルに足をかけ、勢い良く車庫を飛び出した。

学校…学校…

さあ学校に到着、早く着替えてコートに行かなくては…いや、その前に部室によってボールを取ってこないと…あ、まず職員室に鍵を取りに行かなくては…そういうえば鍵はババアが持ってるんだった…いや、それ以前にσ（ε。；）今日は当番じゃなかったわ、急いでだいぶ損した気がするし。

…っと早く行かなくては！

テニスコートオ…

コートに着いた。

ゲゲ（。―。；）、もう部長と副部長いるし…、来んのが早すぎ何だよあの2人は…まあエライのコンビだから仕方ないか。

実はウチの部は今年造られたんだ、俺と部長、副部長の3人でな…。え？何でかって？それはだな…俺たちがテニスじゃなくてソフトテニスがしたかったからなんだ、そもそもこのテニス部に入っていたんだがチョイと乱闘があつてな、それが原因で辞めたってわけ。で、今は部員8人の少数部活動……ってこんな過去話してる場合じゃないんだって！早く行かねば！って、何度同じ事言ってるんだよ（。Q；）！

はい、副部長様にこっぴどく怒られましたと…何で1分1秒遅れたくらいで角生やすかなあ、あれこそ鬼だね。

「烈！独り言言っていないで話を聞きなさい！あと…誰が鬼やと（一。一#）？」

…地獄耳かよ、どんだけやねん。

あ、あの鬼婆…もとい、彼女は蒼山水城、アオヤマミズキこの部を造ろうと言いだした張本人で、この部の副部長だ。

「烈ウ？また地獄に落ちたいかあ？またボールを永遠と下半身辺りにぶつけられたいかあ？」

「その辺にしといてやれ」

「ア…？…って葉じゃない」

今のは翠川葉、ミドリカワヨウこの部の部長だ。

さすがは部長だな、あの鬼婆に脅されたら俺をかばってくれる。

…って、あれ？部長の顔になぜか痣があるじゃないか、なにかあったのか？まさか、またテニス部の奴らにやられたのか？いや、部長のあのホンワリ顔だったらココにくる途中に他の学校の不良どもに絡まれたのかもしれない、部長って前の学校にいたときは超荒れてたって聞いたしな、意外と喧嘩が強いのかも…って、おいおいおいおいまた俺ってば…全く、妄想が激しいんだって、さて、そろそろ部長の顔の痣について聞いて聞いてみるか。

「部長、その顔…どうしたんスか？」

「ん？ああ、これはね、テニス部の奴らが動物をいじめてたんでかばっててね。そのときにね」

「葉、その動物って？蛇とかじゃないわよね…」

「ん？違うよ。この少し大きめの鳥、いや、少しじゃないかな？」

「ん？鳥ツスか？…ってこれは！？」

「知ってるのこの鳥？烈弥のペット？」

「早く白状しろや…ってあれえ？私もどっかでみたことあるよ？」

「イヤイヤイヤイヤ、そりゃあると思うよ？つか部長、あなたも見たことありますよ…まあ、現実でありえるわけないからそう思うなだけでかも知れないけどさ、それに少し大きめの鳥って…普通おかしいと思いましようよ、いや、部長はホンワカしてるからなあ…っかなんで同じ年に敬語を使っただろ俺って…ま、いっか。」

さて、そろそろ真相を…って、これ言っちゃまうと絶対に鬼婆に笑われる…いや、アレを、あの物を見せれば、いや、絶対に玩具だと言われて笑われるに違いない…ってか教えてもいいのか？だめなのか？…まあ黙ってるとは言われてないし彼女も攻めはしないだろう、よし、教えようか。

「ハイハイハイハイ、STOPだ。部長…いや、翠川葉。鬼婆…もとい、副部長…もとい、えっと…蒼山水城様」

「…？どうしたんだい？突然呼び捨てで」

「…様付けしたから半殺しで許してあげるわ。で？何なの、早く言いなさいよ」

「まあ、聞いてくれ、長くなるから。部長の抱きかかえているその鳥はな、ポケモンなんだよ。先に言っておくが証拠はある、この…ガサゴソガサゴソ…ポケモン図鑑だ」

「…ププ…プププププ…アハハハハハッハッハッハハハハッハ」  
「ちょ、水城、笑っちゃ…プププ…駄目だって…ククク」

「…あーあ、予想通りの展開かよ。しょうがねえ、とりあえず図鑑を使ってみるか…お、起動した。うん、やっぱりこいつはポッポだ。で、回収するには…リストバンドでそのポケモンに変身すると研究所…もとい異世界の研究所でいいかな…に送られるのか。じゃ、さっそく、確かりストバンドの番号をポッポの番号に合わせて…準備完了。さて変身だ」

「何独り言いってんの？そろそろ他の部員が来るから準備するわよ」  
「…うっせえよ」

「ア…？何言ってる…ん？またやってほしいのかなあ？」

「うっせえっていつてんだって、こんの糞婆！見てろよ！変身！」

まあ叫ばなくてもいいんだがな、つか逆に変な目で見られてないか？しかも他の部活の奴が今の大声でこっちに向かっているに違いない！ああ、何で大声を出すかな俺は…イヤイヤ、後ろ向きに向かったちやいけない！取りあえず…えっと、確かりストバンドの数字の下にある赤色のボタンを押せば…ポケモンになれるんだな！でことで『ポチっとな』。

一瞬俺の体が光り輝いた、で…眼を開けると…

ポッポになっていた

と同時にポッポは転送された。

どうなる、俺σ（。ε；）！

**第02話 ついに変身…俺、ポケモン？（後書き）**

博士の元に送られたポケモン

No. 16 ポツポ



### 第03話 毒になったら死んじゃう

イヨッシャアアア！！！！！

なあれたなれた、ポケモンになれたあ！！

水城も葉も鳩が豆鉄砲食らった顔してやがる、つか俺もそんな顔してそう…ポッポだけに…って寒っ~~~~（<|>）~~~~。

さて、飛べるかな？

俺はビックリしてる水城と葉をほっというて飛ぼうとした、手を…もとい、翼を挙げ、ジャンプした、素早く腕を…じゃなくて翼を羽ばたかした…が、葉の頭上より少し上（だいたい2mくらいかな）から地面に墜落した。

悔しいが所詮俺は人間だ…空の飛び方なんざ知るわけねえだろ！！くそっ、水城が含み笑いしてやがる、うぜえ。

「…ビックリしたけどさ、その効果を発揮しなきゃ、その翼も意味ないわよねえ…。確かポッポになる前にこんなこと言ってたわね、『うっせえっていったんだ、この糞婆』ってさあ……死ぬ覚悟、できてる？」

うわあ…、水城がこれまでにない笑顔でこっち向いてるよ、俺まだ死にたくないんだけどなあ…、うん、取りあえず元に戻ろう、絶対ポッポのままだと容赦しないと思うし、部活も出来ないしな…いや戻らずにポッポのままいた方が水城から逃げられるかもしれない！あ、駄目だ、葉がポッポかばってテニス部の奴らに殴られてたんだったっけ…このままだと水城より酷いことされそうだ、やっぱ元に戻ろう…ってポッポのままで会話が出来るのだろうか……やってみ

なくちゃわかんねえから、取りあえず言葉を発してみるか。

「ポ…ポ…ポポ」

「…もしかして、ポッポだから喋れないの？…ププ、ばっかみたい」

カチン（怒）、てめえ…俺がポッポだからってなめやがって！！！！

「ポポオ！うっせえんだよ！俺がポッポだからってなめやがって、いい気になんじゃねえよ！つか、おまえの相手してる場合じゃねえんだよ！ここにポッポがいるってことは、他にもポケモンがいるってことなんだよ！まだポッポは安全な方だ、もしも毒ポケモンとかが出てみる、なにも知らない奴らが“毒”になっちゃう可能性はあるんだよ！ポケモンと違って瀕死じゃ済まない可能性はある、だから、俺が…って、俺は何でこんな少年漫画の主人公みてえなこと言ってるんだ！？つか、ポッポじゃ迫力全然ねえ…説得力はあるかもしれんが…しかも、俺声に出して言ってるじゃん。恥ずかし…さらに日本語話してる…ポッポ語の方がましだったよ…」

ということでしたリアルタイム machine gun talkをやっちゃったぜ…、絶対ひいてる、完璧ひいてる、それに俺って今ポッポだし…。

「…部活終わった後、ウチの家の近くの公園に集合。そん時にその…気色の悪い喋るポッポを殺す…いや、拷問…尋問する。あ、ゴメン、質問だったっけ」

「とにかく、烈弥は戻ったら？他のみんなが来たら驚くと思うし。あと、水城もいい加減にね」

「「はあい…」」

部長の言うとおりに戻った、その直後に他の部員が来た。

危ねー、もう少しで我が同志たちに：人違いだ、部員たちに俺が実はポッポであることがバレるところであつた：いや、違う、ポッポに変身する事が出来るという秘密がバレるところであつた：実はポッポって、俺はどんな鳥人間だよ。

その後、部活が終わり、俺と葉は水城の言うとおりに従って水城んちの近くの公園に向かった：知らなかったけど、水城の家は俺んちから眼と鼻の先にあるところだった…。

公園に着いた俺たちは：つか俺は、まずポッポに変身した：何故なら…：水城に今から殺されるからだ、まだ死にたくねえよお！！

…10分後…。

只今の俺の状態…一言で言えば、ボロボロ。

「…烈弥？大丈夫か？生きてるか？水城、弱いものイジメは駄目だよっ」

「ポオ…部長お、俺って弱いものツスカあ？」

「「え…？違うの？」」

こんの鬼婆あ…つか部長までえ？（T^T）、つかポケモン虐待ツスよお、つか…俺ってばつかつか言い過ぎだあ、HELP！！HELP！！ナナミさあああん！！

「呼びました？」

「（・・；）…アンタ、誰？」

「どちら様…でしょうか…？」

「何故にナナミさんがここに…？」

「散歩よ。こっちはどんなのかなって、そしたらポップをイジメている子がいたから、止めに来たんだけど…烈弥君だったのね。でも、イジメは駄目ですよ」

…止めるよ、水城はんなこと言って止まるような女じゃねえぞ…今だってイジメ継続中…。

「はい、辞めます。今後一切、イジメはしません…。で、ナナミ姉様って呼んでいいですかあ？」

「いいですよ」

ゲゲ（。；）、あの水城が改心しやがった…、ありえねー、つか姉様って…、そんな趣味があったのか…、人は見かけによらねえな、…って、あれ？いま公園を囲ってる木が一斉に揺れたような、風邪もひいて…違った、風も吹いてないってのに。

ガサガサ…ガサガサ…ガサガサガサガサ……………。

あ、うん、気のせいじゃなかったな…もしかしてポケモンか？もしかしなくてもポケモンだな、絶対に…って、早よ知らせな！…って言ってるそばから水城の後ろの木に影が！？

「水城！後ろに！」

「え！？…って、謎の草？」

「…（。；）エエツ、ちょう雑魚ポケ？」

「（—|—＃）ピクピク、脅かさないですよ。こんな雑魚ポケモン、サッサと回収とやらをしないよ！」

ナゾノクサは水城の言葉のせいなのか知らんが怒っているように見

える、多分“雑魚ポケモン”だったので怒ってるんだろうな…って言うてる場合じゃないんだっての、回収回収…。

「水城さん、逃げて！【毒の粉】がくるわ！」

なにい！？くそっ！サッサと変身じゃい！すぐさま図鑑を開き番号を調べリストバンドをセット、準備完了、変、身！

【毒の粉】が繰り出される直前にナゾノクサを転送…出来たらしい、おかげで自分はポッポからナゾノクサに変わった…これで水城が“毒”になることはなくなった。

だがその後…くしゃみをしてしまい水城を“麻痺”させてしまい、一週間くらい水城の命令に従わないといけなくなった。

うん、今すぐナゾノクサになって“眠り粉”で眠らせて、ポッポになってこの青空を飛んでいきたい（T^T）。

**第03話 毒になったら死んじゃう（後書き）**

今回博士の元に送られたポケモン

No. 043 ナゾノクサ

## 第04話 家出少女登場！

イヨッシャアアアア！…前回と同じ始まり方のような…ま、気にしない気にしない。

ついに春休み突入だぜい！！

ナゾノクサ回収事件から一週間がたった。

その間、俺は、昼間は水城の召使いの様なことをさせられていた…つか、人使い荒すぎな、俺をなんだと思ってるんだか。

夜になったらポッポに変わり、技とか、飛ぶ練習…いいコーチがいるから、今では飛ぶ事は勿論、技もある程度使えるようになった。

コーチってのは、この前回収したポッポのこと、自分もポッポになることでポケモンと会話が出来るとか…最高だわ、因みにポッポはボールが使えないから俺んちで内緒で飼ってる（飼うってのはおかしいか）、研究所にいちいち会いに行くのダリィからな。

…うん、こんくらいだったかな、早くポケモンを回収してロケット団を退治しないと、世界が混乱しちゃう…頑張ろう！…あ、話してる間に待ち合わせ時間になっちゃった、今日は親戚と会う約束があるんだよ…めんどいけど…なんか相談事があるんだとき、って話してる時間ないんだっての。

俺はダッシュで家を出て、待ち合わせ場所の最寄りの駅に向かった…え？なんでポケモンにならないかって？それはだな…リストバンドを博士に預けているのさ、改良するためだよ、その間にポケモンがわんさか沸いたらどう責任とるつもりなんだろうねえ…。

最寄りの駅：以後、城戸川駅：。

待ち合わせには間に合った、従姉妹はすでに来ていた：何故か制服で：事情を聞いたら家出したとぬかしやがる：因みに従姉妹は春から中二だ、そんな奴を親に内緒で部屋にかくまうのは不可能だ、いや中二じゃなくても不可能なんだがな：学校はどうするんだ？と聞いたら：学校はテロリストに占拠されたと言ったんだよ：：：：どういう返事をしたらいいんだろうか困るっての！取りあえず、従姉妹をどうにかするべく：春休みだから全くではないが人がいない我が学校に向かったんだ：そして不幸は始まった：。

我が学校、以後城戸川第二高校。

学校に着いたのは良かったが今の状況で会うとスッゴいマズい奴らを見かけた：、我がクラスの同志達だ、奴らと俺はモテない仲間だった：

「んゝ、山吹い、あそこにいるのは烈弥じゃないのか？」

「：違うんじゃない？隣にスッゴく可愛い女の子がいますよ？彼に女の子を誘うという行為が出来ると思いますか？」

「：無理だな、烈弥に出来たら俺たちもやっている。第一、この学校にあんな可愛い子いたっけ？」

「知らないよ。それより、補習：遅刻するよ」

「って、いきなり走んなよ」

「灰谷と一緒に遅刻は絶対やだよ」

我が同志達はすぐに走り去っていった：春休みにこんな所にいるから、きつと補習であろう：バカの方の、奴らとは仲間だが、頭の良



さは俺の方が断然上：天と地ほどの差があるくらいなのだ：うん。  
さて話を戻そう、言いそびれたが彼女の名前は赤羽千影<sup>アカバチカゲ</sup>：そして、  
何故学校にいるのかというと…。

「でね、学校がテロリストに：って、どうしたの？頭抱え込んで」

「い、いや、何でもない：そ、それより、どっか行かない？こんな  
駅前をぐるぐる回ってても時間の無駄だし」

「それ、私のセリフ！：ま、いっか。で、どこいく？」

「んゝ…、ちいちゃんはどこ行きたい？」

「って私に振られてもなあ…。それじゃあ、烈兄の学校行ってみた  
い！」

「ん、じゃあ行くか」

というわけ、つか春休みに学校なんか来たかなかったよ：さつきみ  
たいに知り合いにこんなところ見られるのやだし、まあ千影の頼みだ  
から仕方ないけどさ、でも見かけたのが灰谷達で良かったよ：もし、  
もしも水城だったら…：考えるだけでもおぞましいよ。

「烈兄ィ：どしたの？汗ダラダラだよ？」

「い、いや、気にすんな：（。。。）…………ン？：（□）；  
）！！」

「烈兄、か…顔が…ヤバくなってるよ」

（（（。；）））

「烈兄ィ？おーい…」

（（（。；）））

…はっ!?

や、やべえ

千影がこつちを変な目で…いや、今はそんなこと言ってる場合ではない! ななな何故に…

学校の屋上にロケット団がああああ……………。

いいや…ほつとこう、とりあえず千影を安全な所にやって、俺がポツポになって……って、今日リストバンドねえじゃん! 千影え…助けてよお（俺ってば情けねえ!）。

「烈兄? ほんとにどうしたの? 屋上なんか見てさ、何もないじゃん。え? 何? 次は私!?? そそそそんなにジロジロ見ないでよ! わ、私…ぶつぶつ…」

な…なんすかこの展開、何故に背景がピンク色…って千影の言うとおりロケット団いなくなってるよ…いや、単なる見間違いかな、きつとそうだ! そうに違いない……いや、もし見間違いでなかったら…ヤバイ! 灰谷 and 山吹がとてつもなくヤバイ! え? 何故灰谷と山吹だけかって? だって補習あいっただけだし、先生も来るのがかったりいからって教室に監視カメラつけてるし…奴らは底抜けのバカだからな、いやキング・オブ・バカ・コンビだ!…はっ! こんな変なこと考えてる暇はねえ! 早く教室に様子を見に行かねば! で、俺は千影をおいて急いで教室へ向かった。

「え？ちょ！烈兄ィ、どこいくのさあ！？」

「散歩」

「うそだあ！！置いてかないでよお！！」

「無理」

「：いいよっ！勝手についてくから：」

「オウ、勝手について来い……o(^▽^)o、nice time ingだ：ウイング」

「う、ういんぐ？翼？烈兄？」

説明しよう、ウイングとは：あのポップの事である、会話をしていたのだがポケモンにも名前があったのだ、まあ確かに：ポップだらけのなか全員がポップってのもおかしいからな：会話が出来るから名前がわかるけど普通のトレーナーの場合はわからないからニックスームつけるんだな：多分……。

ウイング：以後翼な、なげえし：は、足に何かを掴んでいた、それは改造済みのリストバンドだった：つかポケギアの画面の部分をリストバンドに付けただけのような：まあ気にせんとこ、さて、使い方だ：あ、マニュアルめつけ：さてさて、お！ポケモンの転送が出来るのか：後でやってみよう……ってこんなことしてる場合じゃねえじゃん：って前にもこの台詞言ったような：いっか、気にせず行こ（この間1分半）。

早速、千影にポップを見せるわけにはいかねえから転送して：

いざ……決戦の場へ……（いやまだ早いな）

（烈兄…独り言言ってるけど…ちょっと心配…よし！私が烈兄の支えになってあげよう！）

## 第05話 学校での戦い！ 前編

俺の名は灰谷大翔<sup>ハイトニヒロト</sup>、只今補習の真っ最中…だが先生居ないから最近流行りだした一昔前のゲームをやっている。

僕の名前は山吹輝<sup>ヤマブキアキラ</sup>、只今補習を受けています…先生がいないけど監視カメラがあるから、真面目に自主勉強中。

俺はゲームをしながらあることを考えていた…それは、なぜ奴がそんなに可愛い子と一緒にいたのかだ…抜け駆けは一切ユルサネエ！

僕は自主勉強をしながらあることを考えていた…それは、なぜかこの校舎で見かける黒服の男達のこと…先生のようにも見えなかったし…。

「何なんだ（よ／ろう）…いったい何がどうなって…って…ハモんな！」「

うわっ！山吹とハモった…あれ？あいつがあんなこと言うの珍しいな…ま、いっか、それよりもビートの奴…おとなしくしてっかな…  
そういえばエサ、あげたっけ？

灰谷とハモるとか…まじ最悪…どうせ烈弥の彼女が気になってるんだろな…そんなの僕はどうでもいい…そういえば、昨日拾ったあいつ…おとなしくしてるんだろか…。

ガラッ！！

「「ん？」」

バカコンビが教室でハモっている頃…烈弥は千影をほっという教室へ向かっていた。

千影…はどっか消えるし、教室…は遠いし、俺…は向かう途中バナナの皮に滑って転けるし…さらに階段から転げ落ちるし…そんなことがあったにも関わらず…バカコンビの話にしゃがって…後で覚悟してやがれ！つか、教室ってこんな遠かったっけ…あ、いや、見えってきたわ…一応ポケモン変身リストバンド…略してポケドをセットしておいて…あ、機能については次の機会に話してやるよ。

俺は勢い良くドアを開けた…そこには、ロケット団と思われる女にペコペコしてる灰谷と、うわあ…的な眼をしている山吹がいた。女は俺に気づいていないのか、灰谷に話しかけた。

「すみませんすみませんすみませんすみません…」

「そう…出て行く気はないのね…じゃあ、この学校を私達にくれるのであれば…一度だけ何でも言うこと聞くわよ？」

Σ（（〇；）） 烈弥

（（□；））！！！！ 輝

（／＼／＼／） 大翔

（b≧▽≦） 女

「ま、マジデカ…ならこの学校あげちゃってもいいかな？」

そういった瞬間…山吹は机の上にあった辞書で灰谷の顔面を殴り、灰谷が声を漏らすまもなく俺が飛び膝蹴りを腹に一発かまし、そして俺は奴の胸倉を掴んだ。

「アホか！何、誘惑されてんだよ！それに、明らかに年下だろうが！お前は変態か、変態なのか？その年で犯罪者の仲間入りか？ていうか、なんでお前が学校の代表になりちゃっちゃと決めちゃってんだよ！普通校長先生とか理事長が言うもんだろ！…ゼイゼイ」

おっと、ついつい本音が…つか、説教してる場合じゃねえ…この女を…早く何とかしないと…こいつらまで巻き込んでしまう…いや、すでに巻き込んでいるか。

「ねえ…あんた、何邪魔してんのよ」

「あ？」

女が話しかけてきた、邪魔？当たり前だっけ。

「あ、もういい。あんた…殺すから」

女は腰に手をやり、丸いものを取り出して、軽く放り投げた。

「私の名前は、RAIN：レインよ。よろしくね：ウフフ」

レインが言い終わると同時に丸いものは地面に当たり、開いた：そして中から：

「ニョロ：」

ニョロゾが出てきた：俺はすぐさまポケドを確認して、ニョロゾに変身しようとした：が、できなかった、というか、今変身したら灰谷と山吹が絶対に言いふらす：つってもこの状況をすでに見ているが：いいや、ポップを転送しちまおうか。

「ニョロゾのトード：あら？あんまり驚かないのね：普通ポケモンが現実には現れたらあなたの後ろにいる二人みたいに興奮したり吃驚したりしただけど：」

レインの言葉を聴いて、後ろを向いてみた：彼女の言うとおり、灰谷は：興奮しており、山吹は：あれ？冷静：あ、吃驚して固まっているのか。

マジ？マジで？ポケモンって存在したのか！？ゲームの中だけだと思ってたのに（ $\geq \nabla \leq$ ）：てことは、ビートもポケモンなのかな？なんか異様にでかかったし。

こんな、こんなことって：あ、そうか：きっとこれはホログラム：立体映像なんだ、そう考えれば話が早いや：そうだ、こんなことが現実起こってはいけない：。



「さて、あなた」

「ん？俺か？なんだよ、この烈弥様に向かつて」

「最後に言い残すことはないかしら…」

「ん？最後？……何を寝ぼけたこと言っただろうねえ」

「…そんなことが最後の言葉？まあ、いいわ。トード…あいつに向かつて【冷凍ビーム】よ」

「ニヨロ…ニヨニヨニヨニヨ…」

れ、冷凍ビームだと！？それを覚えていってことは、結構なレベルだということ…俺には対抗できそうにない…いや、諦めてはいかん！後ろには灰谷と山吹がいるんだ、考えろ自分！今、俺にはポツポとナゾノクサのデータを持っている…弱点的に考えてナゾノクサが適任だな、だが冷凍ビームを浴びたら…即死だな、とりあえずポツポで逝こうか…翼<sup>ウイング</sup>を転送して、あとはぶっつけ本番ってことで。

「考えても無駄よ、あなたは死ぬ…氷付けになったら息も出来ないでしょ」

「フッフッフ…考えは纏まったよ…ニヨロゾが溜めている間になあ！」

「じゃあ、お疲れ様でした。ニヨロゾ、発射…」

「ニヨニヨニヨニヨ…ニヨロオ！」

ニヨロゾが叫んだ途端…冷凍ビームが放たれた…俺は氷付けにされてしまうのか…どうなる俺！？

ダァン！

冷凍ビームが何かに当たった…俺が考えられるのだからきつと他の

何かに：俺は恐る恐る眼を開けてみた：そこには灰色の丸い物体が宙に浮いていた。

「な：なんで：？なんであんた、こ：氷付けになってないのよ：いえ、そんなことより：あんたもポケモン持っていたのね：」

ポケモン：宙に浮いていた丸い物体は電気タイプのコイルだった、だがコイツは俺のポケモンじゃないぞ？いったい誰のだ？

「お前：ポケモンだったのか？」

「その声は：山吹？」

後ろで冷凍ビームにビビって気絶している灰谷の隣りで山吹が声を漏らした、つか：灰谷情けなさ過ぎ。

「ビビビ：ビビ」

「ニヨ：ニヨロ…」

丸い物体は図鑑によるとコイル、今、ニヨロゾと睨み合いを続けている：俺には何かを待っているように見える、おそらく：。

山吹（（（。；）））

「：どうしたの？命令しないの？じゃあ：確実にしとめるわよ？」

やべえ：俺がコイルに指示した方が早い：だが今初めて出会った人間の言うことを聞くわけはほとんどないだろう、多分、だが山吹は現実逃避に向かってる：このままだとコイルが無駄死に：。

「コ：コイル！でででで：【電磁波】だ！」

「ビビ：ビビ！」

「ぼぼぼぼ僕は、コイルの：家族なんだ！コイルが戦ってるのに僕がやらなくて：どうするんだ！」

山吹の指示によりコイルは電磁波を繰り出した、やけに震えていたが：まあ現実逃避をするよりましか、でも、おかげでニョロゾは麻痺状態：さあ、俺も行こうか！

「転送！翼。<sup>ウイング</sup> 変身！No. 16 ポッポ」

叫び：変わった、そして：翼師匠がポケドから出て来た、山吹がうわあと叫び、レインが驚きの表情を見せた：吃驚して当然だろう、人がポッポになったんだから：って考えてる暇ないっての！

※此処より下は烈弥と翼はポケ語

「ウィン師匠！ニョロゾは麻痺状態です！どうしますか？」

「弱っているならとことん狙うだけだ。：【風おこし】！」

「イエッサー！」

2匹で翼を羽ばたかせ風をおこした：風というよりも竜巻に近いような気がするが：

「放てえ！」

「了解イ！」

それはニョロゾにぶつかった：ニョロゾは吹き飛ばされ教室の窓（2階）から落ちていった。

「トード！：あんたたち：許さない！」

「ななな何をする気！コイル！」

「ビビ…ビビ」

「ポポオ！＼（◇）／（これ以上何かするのは…許さねえぞ、変身！）」

「ポオ…（＊、ㇿ）Ⅱ<sup>3</sup>（烈弥よ、ポップ語は人間にはわからんよ）」

俺は烈弥に戻った…会話をするためにだけどな。

「レイン…何でロケット団なんかに肩入れしてんだよ」

「………言わない」

「言えよ」

「五月蠅い！…カチッ」

レインはモンスターボールを手にとった…ニョロゾを戻すのだろうか。

「逝って…free…」

「待ってレイン！それを使っては駄目！」

レインが何かを出そうとした時…窓から天使が光臨した…ような気がした、言い直して窓からニョロゾを抱えた少女が舞い降りた…。

彼女はいったい誰なのか…。

レインが唱えたfreeとは何なのか…。

そして…灰谷の出番は来るのか…。

## 第05話 学校での戦い！ 前編（後書き）

テストとか補習とかにより更新が遅れました

申し訳ない

何かと忙しいですがゆっくり更新します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1705g/>

---

リアルDEポケモン

2010年10月21日23時30分発行